

地域に定住する日本語非母語話者（外国人配偶者）の言語生活に関する縦断的研究

—OPI (Oral Proficiency Interview) テストを活用した会話データを事例として—

野山 広 (国立国語研究所)・塩谷 由美子 (国立国語研究所)・嶋田 和子 (イーストウエスト日本語学校)
旗野 智紀 (慶應義塾大学大学院)・山辺 真理子 (立教大学)

1. はじめに

本発表では、地域に定住する日本語非母語話者の中でも、毎年約3万人ずつ増加しているという国際結婚の外国人配偶者(妻)に焦点を当てながら、OPIテストを活用した会話データの内容や言語生活に関するインタビューから得られた情報を事例として取り上げ、その分析結果について報告したい。

2. ACTFL-OPI とその先行研究

ACTFL-OPIは、全米外国語教育協会が開発した汎言語的に用いることができる会話能力テストである。近年、日本においてもそのテスト数が増えつつあり、数々の日本語教育の現場において、その学習効果の評価に利用されてきている。こうした中、様々な背景を持つ日本語を母語としない人々が多く存在する地域の日本語教室において、その活用の意義は大きいと思われる。地域生活において、会話は重要なものであり、多様な学習者の会話能力を的確に把握することは、多様な学習者に対して柔軟に対応することを期待される地域の現場＝学習支援プログラムの充実に向けても、欠かせない基盤となりうる。

これまでの非母語話者の言語運用能力に焦点を当てた研究では、運用能力の正確な把握のために、彼らの言語生活や環境を考慮することが重要であることが指摘されている。松尾(2000)は、インタビュー調査により、特定の地域における日本語の会話能力とその規定要因(世代差・生年・小学校入学後の両親と使用言語など)との関係性を調査している。その中で、会話能力を規定する説明変数の検出のためには、より広い調査が必要であると述べている。

OPIテストに関係する先行研究もいくつかある。鎌田(2005)は、OPIの概要を述べた後で、日本語学習者が日本語を媒介とした言語活動を行っている実際の接触場面を、研究することの必要性を提唱している。学習者の主体的な学習プロセスの実態、およびその実態をとりまく言語生活・言語環境の把握の必要性を論じている。

また、OPIをより応用的に活用している研究も存在する。堀井(1998)は、OPIテストを行った後で、被験者に判定結果を伝えるのみならず、できる限り学習の参考になるようなコメントをフィードバックした、という実践報告を

行っている。テープやVTRを用いたテスターによるフィードバックの課題を探っている。渡辺(2005)は、運用能力という概念を含めた、OPIテストそのものの妥当性とその過去20年にわたる議論を紹介している。それと同時に、OPIを使った先行研究を紹介しながら、第2言語習得から言語行動の解明にOPIが応用の可能性を持っていることを示唆している。助川・吹原(2008)は、在日インドネシア人就労者の日本語習得とその促進要因を探るために、OPIを活用して100人の茨城県大洗町に在住するインドネシア人就労者の口頭能力を測定、分析している。その結果として、大多数(6割以上)が初級の中レベルにとどまっていることを指摘するとともに、その要因について追究している。この研究は、縦断調査として行われており、今後の成果・報告が期待される。

3. 問題意識と研究手法

上記のような先行研究において、地域における日本語学習者について実施したOPIテストの談話・会話分析を、社会言語学的観点から行ったものはほとんどない。多様な需要・要望に応じながらの運営が期待される日本語教室において、OPIのような言語運用能力テストの活用は、より適切な教育方法や内容を追究・開発する上で、今後さらに注目される可能性が高いと思われる。

発表者の所属する機関では、日本語・日本語教育研究の充実、共同研究、連携・協働活動の拡充等を目指して、日本語教育データベースの構築を目指している。その一環で、先述の地域で生活する外国人住民(定住者)の需要に応じた日本語教育の充実に向けた基盤情報の一つとして、OPIを活用した日本語学習者会話データの収集、整備を行っている。このデータ収集のプロジェクトとして、横断的に多数(300人以上)のデータを収集するとともに、縦断的に少数(20数名)のデータも収集している。

ここでは、東北地方(A県B市周辺)で収集した後者のデータの一部を事例として報告したい。具体的には、2007年9月と2008年3月にA県B市周辺に居住する日本語学習者を対象に実施したOPIの録音データ(約30分×12=360分)のうち、主に外国人配偶者10名の会話に焦点を当て、文字化資料(日本語学習者会話データ)に見られる音韻的、統語的な特徴、語彙や話題(トピック)の特

徴、地域での言語生活や学習環境がもたらす方略（ストラテジー）、母語話者（テスト）や非母語話者（学習者）の会話の傾向などについて報告する。

この地域では、方言、家族・近所づきあいを含む人間関係、言語学習支援組織の有り様など、学習者を取りまく言語環境は、都心部や外国人集住地域とは異なっており、興味深い結果が予想される。

4. データ分析・議論

OPI テストの音声データを文字化するにあたり、日本語非母語話者の言語生活を、より顕在化するために、有意義な文字化のスキームを考えることは重要である。ここでは、紙幅の都合もあり、その文字化の枠組み作りの過程や課題について多くは触れないが、発音の特徴、相づち、非言語情報、個人情報への扱いなど、日本語教育データベースの構築に向けての課題は少なくない。

地域の縦断調査で収集した録音データの談話分析を先述の観点（音韻的、統語的な特徴、語彙や話題の特徴、方略などの観点）から行った結果、以下のような特徴がみられた。そのすべてが地域の言語生活に起因する特徴であるとは限らないが、データの観察において顕著であった談話を挙げることで、OPI テストが非母語話者の言語環境の整備促進に貢献する可能性を追究したい。

凡例（抜粋）

T: テスター、I: 学習者、

< >: 相づち、{ } : 非言語情報

[] : 実際に発話された音声、** : 不鮮明な音声、

… : 相手の割り込みによる発話の中断

4.1. 音韻的特徴：OPI における音韻と意味の扱い

OPI テストは、テストの音声を録音し、その録音したものを1名または複数のテストが聞き直して評価する。これにより、TがIの発話をテスト中では誤って理解したものについても、発話された表現や前後の文脈を何度も観察することで、正しい理解が得られることがある。

(1)

T: そうですね。

えっとー、聞いたり話したりいろいろありま、何が一番難しいですか？。

I: {息を吸う} 何、うん、丁寧 [てねん] 言葉難しい。ちょっと、何、最初勉強した*に <うん>、速い、覚える、欲しい <うん、うん>。

丁寧 [てねん]、言葉難しいね <うん>。

あと、どちら、チョイスね <うん>。

あと、チョイス***きい、速い言葉覚えた。

あー、* <うん>、あと、今、今、ちょっとね <う

ん>、丁寧 [てねん] 言葉必要 <うん>、私は。

T: 足りない言葉。

I: うん、丁寧 [てねん]、うん。

T: 足りないなと思うのは <うん>、どういうこと、何の関係ですか？。

料理の言葉とか、いろいろありますよね。

(1)において、Tは、Iが日本語学習においてどのような言葉に困難さを感じているかを問うている。それに対するIの「てねんことば」という発話を、Tは「足りない言葉」と解釈している。しかし実際には、Iは「丁寧言葉」と伝えたかったのであり、それはIの発話した「チョイス」などの語を精緻に観察することで理解できる。

音声に対する適切な意味づけは、会話のプロセスで構築されていくので、言語教育に携わる者は、学習の際に十分な時間をとることが必要である。また、このような事実は、音声データを文字化する際に、TやIの不明瞭な発言をどこまで解釈し復元するか、という問題にも関係してくる。

4.2. 統語的な特徴：相互行為的会話方略

Tの質問に対しIが答えようとする際に窮している場合、Tが質問文をもう一度言うのではなく、答えの前半（上の句）を提示することで、Iが回答のきっかけをつかむことがある。

(2)

T: そうですか、どんなところが違いますか？。

I: うー、【地名2】に山いっぱいね。

あと、例えば [ととば] 道路 <うん>、あと、これね <うん>。

うー、【地名1】全部 [ぜんぶん] これね。

T: 全部何ですか？。

I: あー、道路。

T: 道路が、はい？。

I: うーん、【地名2】に山いっぱい。

T: 山がいっぱい <あん、いっぱい>、【地名1】は…

I: だが、海、海****。

(2)において、Tは【地名1】と【地名2】の特徴の違いについてIに質問をしている。Iは【地名2】に山が多いことを述べるが、【地名1】に関しては特徴を述べられないでいる。そのとき、Tにより、「全部何ですか」「【地名1】は」などを提示されることにより、【地名1】に関する適切な情報を発話することが可能となっている。

非母語話者は、日本語による質問文の意図や、それに対する応答のきっかけがわからないことがある。この分析により、言語生活において、質問や情報の提示の仕方工夫が必要であるということが示唆される。

4.3. 統語的あるいは語用論的な特徴：省略や話法

【Tの事例】：Tは、母語話者同士の会話の特徴と同じように、Iが実際にTの発話を理解しているか否かにかかわらず、無意識のうちに最後まで言い切らずに文を終わらせることがある（T側の省略話法）。

(3)

T： じゃ、その、シイタケ取り、今、シイタケがいっぱい、こう〈うん〉、ちょうど盛んに取れるときで〈はい〉、一応、もう、ずーっと、この1週間は毎日お仕事をすることになってるんですけど〈はい〉、えー、どうしても、今日、あした〈うん〉、あした、急に〈うん〉休みたくな、休みたくな〈うん〉、と思いました〈うん〉。

(3)において、「休みたくな〈うん〉、と思いました。」というやりとりが観察される。これは、Iの相づちを聞いて、Iの理解の有無にかかわらず、Tが省略を行うこともあるということを示唆している。文化的背景や学習レベルにより、言い切りの形に慣れている日本語非母語話者Iにとって、Tが会話の中でこのような省略を行うことは、理解しにくくなる可能性がある。しかし、より自然な会話が起こりうる地域の言語生活においては、このような省略をOPIテストの際に考慮しながら会話を展開する必要があると思われる。

【Iの事例】：上級レベルの話者であるIは、文を区切らずに1文が非常に長くなる傾向を持つ者がいる。それで、地の文と引用の境界が極めて曖昧になることがある。中級レベルであるIには、話題の転換に際して、談話標識に当たることばを使用しないで、話し続ける者がいる。

(4)

I： 途中しか見てないです〈はい〉けれども〈はい〉、ちょっと、その一、あの一、主任〔しゅに〕、おそこそ、主任役の、あの一、バッグ売り場〔パークリノ〕〈はい〉の彼女なんですけども〈はい〉、主任役のかたが〈はい〉、あの一、フランスに研修に最初、あの一、行くこ、こと、なつた〈はい〉んですけれども、結局、他のかたから、そ、その前に、実は〔じぞー〕、結構長いんですけれども、スポ、あの一、プロポーズされて〔プロポーズされで〕〈はい〉、いろんなかたからね、で、その、悩んだ結果に〈うん〉、あの一、いちな、幼馴染みのかたと結婚するということで、決めたんですね〈うんうんうん〉。

(5)

T： はい、ストレス解消のために具体的にはどんなこと？。

I： フィリピンの食べもの、みな、ひとりひとり、なにか、あの一、自分、自分で作ったもの、持ってき

たり、みなに食べさせたり、食べながら、そっこの悩む、こっこの悩む、こっこの悩む、「そうですね、あなただけではないよ、こっこともだよ」って、「大変ですね、がんばらなきゃいけないんですね〈うん〉」。

(4)において、中国出身の話者Iは、「けれども」という表現を用いて、長い文を発話している。また、(5)において、フィリピン出身の話者Iは、日常生活に悩みを感じたときに近所の主婦たちと集まって世間話をする様子を、適切な談話標識を伴わずに発話している。これらの現象は、会話レベルを問わず見受けられるものであり、言語生活者の母語による干渉が原因となっている可能性もある。話題の転換時には適切に文を区切って発話することを学習時に練習することの重要性を示唆している。

4.4. 語彙や話題の特徴：地域方言・社会方言

外国人配偶者Iの発話には、A県B市周辺の地域方言と予想されるような語彙や発音の特色が見られる。

(6)

I： て、らんという、このピビンパブの、あの一、昔〔むがし〕、あの一、畑もない、田んぼもないときに、野菜だけとって食べるの地域があったのよ、昔々〔むがしむがし〕。

それで、1月の15日の日、余ったのご飯〔くあん〕の上〔うい〕さ、これを混ぜて食べれば、おなかいっぱいなるから、これが、ピビンパブになったのよ。

だっけ、日本の場合〔ばや〕、混ぜご飯でもいいかな、名前が。

(6)において、韓国出身の話者Iは濁音などの使用や、「だっけ」などの特定の語彙において、方言の影響が見受けられる。発音の問題は、言語生活者の母語による干渉を理由とする可能性もあり、一概に地域方言の影響とはいえない可能性もある。地域における言語教育現場での学習環境への配慮が求められる。

一方、地域における言語生活者としての社会方言の影響と思われるような発話も観察される。

4.5. 方略の特徴：生活や環境がもたらすもの

(7)

I： わからないけど、やっぱり、なんか、あの一、やっぱり、学校、小学校なら、全部、どこでも同じだと思っただけど、でも、なんか、レベル違うとか言われて、なんか、こら、あの一、ずっと、く、マレーシアにいるんじゃないかと、あの一、2年か3年のあと、また日本に戻るから、で、もし、今、行って、で、また、こっち、戻る、だと、あの一、子どもな、慣れないでしょうか、とか、うん、わからないと〔笑〕。

(8)

T: じゃ、えー、今度5年生になるお子さんと〈そうそうそう〉、1年生になるお子さん〈そうそうそうそう〉、2人を連れてマレーシアに〈うんうん、うんうんうん、うんうんうん〉。

(7)(8)のように、「やっぱり」、「なんか」などのフィラーを、学習レベルに関わらず用いる話者Iが多い。「そうそうそう」、「うんうんうん」などの相づち(方略)も特徴的である。地域における日本人主婦との会話や集会での談話の特徴を、Iがインプットしている結果であると予想される(言語生活や環境の影響)。

4.6. 話題の特徴：外国人配偶者の場合

地域の植物・魚、大型商業施設についての意見、ベルマーク集め等のPTA活動、宗教的背景、居住する街の住みやすさやそれと東京との比較などが特徴的である。

(9)

T: わか…

あの一、ちょっと話は変わるんですが(はい)、あの、【地名2】に来て、ほんとにね、あの、きれいな街だなと思って、静かでとてもきれいな街なんですけど、ある旗を見ました、「出店反対」という、なんか、あの、大型で、【商業施設名1】のですね。

I: 【商業施設名1】ですね。

わたしは…

T: それについて、どうお思いになる…

I: 賛成ですね。

T: 賛成ですか。

I: はい。

T: そうですか。

どうしてです…

I: やっぱり、あの、そうですね、あの、このままだと、なんていう、み、活性化っていうか、も、できない、なくなる、っていうか、もともとその、あの一、みなさん、反対してね、わかるんですけど、でも、よそのほうに、はいてくないと、こう、なんていう、こう、進歩がないじゃなく、なんていうかな、(後略)

(9)において、Iは、A県B市にある大型商業施設について、賛成という立場を明確にして意見を述べている。地域に生活する外国人配偶者にとって、このような話題は非常に親しみやすいものである。この事実は、地域日本語教育において、どのような学習項目やリソースを選ぶと、習得に向けてより効果的なのかについて、示唆を与えるものである。Tや文字化に携わる関係者を含めて、地域の言語教育支援の場に関わるものは、当該地域に関する一定の知識を持っていることが期待される。

5. おわりに・展望

地域における生活の場で展開される会話は、統語的・文化的に異なる言語規範を持つ母語話者・非母語話者の交流活動や共同作業によりなりたっているという実態が、今回の調査結果から改めて窺えた。こうした実態を認識しつつ、適切な配慮をしながら、共同作業をできる限り円滑に進めるためにも、例えば、地域の学習支援の現場の関係者との協働で、会話の話題の管理や、方言の問題への対処方法等の要素を織り込んだプログラムを構築していくことが期待される。この期待に応えるためにも、このような会話データの収集や縦断調査の実施により、日本語教育学的にも社会言語学的にも、応用性の高い基礎資料を提供していきたいと考えている。

当日は、参加の方々と議論や情報交換を図りながら、いわゆる「社会福祉としての言語学」という観点から縦断研究や談話分析の可能性を探求できたら幸いである。

参考文献

- 鎌田 修. (2005). 「OPIの意義と異議—接触場面研究の必要性—」 鎌田他(編)『言語教育の新展開』 pp. 311-332.
- 助川泰彦・吹原豊. (2008). 「在日インドネシア人就労者の日本語習得とその促進要因」 2008年度『異文化間教育学会 第29回大会抄録集』 pp. 70-71.
- 徳川宗賢(1999)「ウェルフェア・リングイスティクスの出発」(対談者 J.V. ネウストプニー)『社会言語科学』 第2巻第1号 pp. 89-100 社会言語科学会
- 堀井 恵子. (1998). 「ACTFL-OPIの手法を使った会話力向上の練習の可能性」 武蔵野女子大学紀要 33号 pp. 9-16.
- 松尾 慎. (2000). 「ブラジル日系人の会話能力とその規定要因—南マットグロッソ州ドウラードス市共栄移住地におけるインタビュー調査より—」 大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流 第4号. Pp. 17-33
- 渡辺 素知子. (2005). 「ACTFL-OPIの妥当性と応用に関する先行研究のまとめ」 鎌田他(編)『言語教育の新展開』 pp. 333-347

謝辞

本調査の実施に際して、協力いただいたA県B市の方々や所内外の関係者の方々に、改めて感謝申し上げたい。

連絡先

野山 広 (国立国語研究所)

〒190-8561 東京都立川市緑町10-2 国立国語研究所
wisen@kokken.go.jp